

平成25年度 日本獣医師会獣医学術賞の受賞者及び受賞研究業績

本年度の日本獣医師会獣医学術賞の選考は、「獣医学術奨励賞」は日本獣医師会雑誌の平成23年8月号（第64巻第8号）から平成25年7月号（第66巻第7号）に掲載された原著・短報を対象に、「獣医学術学会賞」は獣医学術学会年次大会（千葉）において発表された地区学会賞の中から、「獣医学術功労賞」は推薦のあった永年の功労の業績の中から、選考委員会において厳正に審査され、平成25年度日本獣医師会獣医学術学会年次大会（千葉）における授与式において、本会蔵内会長から本賞（賞状）が、協賛会社（日本全薬工業㈱、共立製薬㈱、日本ハム㈱）から副賞（研究奨励金20万円（目録））がそれぞれ受賞者に授与された。

表彰された受賞者及び研究業績の一覧は次のとおり。

平成25年度 日本獣医師会獣医学術賞受賞業績

【産業動物部門】

獣医学術奨励賞：

「兵庫県中部におけるアカバネウイルスによる子牛の非化膿性脳脊髄炎と先天性奇形を伴う異常産の発生」

富田啓介（兵庫県姫路家畜保健衛生所），他
 〈選考理由〉アカバネ病の生後感染原因は、genogroup I であることが知られていたが、本論文はgenogroup II も子牛に生後感染を起こし、しかもgenogroup II の中にも病原性の違いがあることを明らかにした。本研究で分離されたウイルスは、S RNA分節の系統樹解析によってOkayama2004株と近縁で、生後感染型の脳脊髄炎を起こすことが知られているIriki株や、2006年流行株とは異なるgenogroup IIに属し、先天性奇形を伴う異常産に先立ち、子牛の脳脊髄炎の原因となることを明らかにした。このことは世界でも最初の発見であり、学術的に高く評価される。

獣医学術学会賞：

「黒毛和種子牛における離乳時の母子分離と牛房移動が发育及びストレスに及ぼす影響」

吉田恵実（兵庫県立農林水産技術総合センター），他
 ター・畜産技術センター

〈選考理由〉黒毛和種子牛の離乳時における母子分離は、ストレスを生じて、子牛の健康や发育に悪影響を及ぼすと考えられるが、従来から子牛を母牛から分離し牛房を移動するという方法がとられている。本研究は、母牛を分離・移動させるという新しい方法によって子牛のストレスが軽減され发育が改善されることを、血液性状と行動の観察によって明らかにしたもので、獣医学術の研究の進展と離乳期子牛の疾病予防と生産性

の向上に著しく寄与する業績と認められた。

獣医学術功労賞：

「産業動物の獣医繁殖学に関する研究と普及」

澤向 豊（酪農学園大学・元教授）

〈選考理由〉澤向 豊氏は、北海道内の農業共済組合家畜診療所及び北海道農業共済組合連合会家畜臨床講習所において長年にわたり産業動物診療と中堅臨床獣医師の卒後教育に従事しながら、産業動物獣医繁殖分野の研究・普及に多大な成果を挙げた。その後、同氏は酪農学園大学獣医学部獣医繁殖学担当教授に就任し、産業動物の繁殖管理及び繁殖障害に関する先端的研究を進め、多くの業績を挙げられた。これらの研究業績と指導及び普及の成果は、産業動物獣医学の振興と普及に大きく貢献することから、獣医学術功労賞に該当するものである。

【小動物部門】

獣医学術奨励賞：

「犬猫の各種感染症における原因菌とアンチバイオグラム」

嶋田恵理子（みやもと動物病院・山口県），他

〈選考理由〉本論文は、犬猫の各種感染症症例の臨床材料を用いて、原因菌と薬剤感受性を検討し、アンチバイオグラム（抗菌薬感受性率表）を作成したものである。アンチバイオグラムは経験的初期治療を適切に行うために必要であるが、これまでに獣医療分野では報告がなく、そのために不適切な抗菌剤の投与や耐性菌を増やす危険がある。本研究の成果は、初期治療における重要な情報を提供するとともに、今後、より広範

囲で最新の検討によるアンチバイオグラム作成の重要性を示した点は、高く評価されることから、獣医学術奨励賞として推薦する。

獣医学術学会賞：

「波状の洞毛を持つネコの白血病陽性率に関する検討」

森下正隆（いはいま動物病院・愛媛県），他
〈選考理由〉本研究は、特殊な検査機械を使わずに身体検査の所見をもとに、猫白血病ウイルス感染と曲がった洞毛の関係を証明した研究で、大変オリジナリティーに優れ、臨床獣医師が直ちに应用可能な研究成果である。学術的には、曲がった洞毛の免疫化学染色によってウイルスの存在を証明しており、今後のさらなる研究の発展も期待できる研究内容であり、獣医学術学会賞を受賞するにふさわしい研究であり推薦する。

獣医学術功労賞：

「犬猫の脊椎・脊髄疾患の診断・治療」

中山正成（日本小動物獣医学会・元副学会長）
〈選考理由〉中山正成氏は、長年にわたり獣医学臨床分野の充実と獣医学臨床研究の発展に尽力され、特に小動物診療分野における新しい手術器具の開発やX線フィルムボディマーカの開発などの診療技術情報を幅広く発信し続けてきた。また、同氏は北里大学非常勤講師や、大阪府立大学臨床指導教授、帯広畜産大学臨床指導教授を務められ、大学における臨床教育にも尽力するとともに、学術誌において多数の論文を公表した。これらの活動は、小動物獣医学に関する学術の振興と普及に多大な効果を上げていることから、獣医学術功労賞を授与するのにふさわしいと考えられた。

【公衆衛生部門】

獣医学術奨励賞：

「山口県内のペットショップで販売されている爬虫類のサルモネラ保有状況及び薬剤感受性」

亀山光博（山口県環境保健センター保健科学部），他
〈選考理由〉本論文は、ペットショップで販売されている爬虫類139検体でのサルモネラの保有状況について広範囲に調査し、サルモネラ保有率が全体で50%と高いことを明らかにした。これらの点は学術的に高く

評価される。また、爬虫類から分離したサルモネラは薬剤耐性率が高いなど、公衆衛生上の重要な知見を示したことから、本論文は獣医学術奨励賞に値するものである。

獣医学術学会賞：

「蛍光RT-Multiplex PCR法による食中毒等集団感染事例からの下痢症ウイルスの検出」

東久保 靖（広島県立総合技術研究所），他
保健環境センター

〈選考理由〉本研究は10種類の下痢症ウイルスを一度に検出する新たなMultiplex PCR法を開発したものであり、PCR産物のサイズと蛍光色素の違いにより10種類の下痢症ウイルスが識別可能となった。本法は極めて実践的で実際に食中毒に応用が可能であることから、今後、広く普及することが予想される。このため、公衆衛生上、非常に画期的な方法と評価されることから、獣医学術学会賞として推薦する。

獣医学術功労賞：

「食の安全と感染症制御に関するリスクコミュニケーション活動とその啓蒙」

岡本嘉六（鹿児島大学・名誉教授）

〈選考理由〉岡本嘉六氏は、農場から食卓までの食品安全性確保及び感染症制御の研究に長年従事し、HACCPやリスク解析などの調査研究を行ってきた。特に、リスクコミュニケーション活動を幅広く実践し、獣医師の生涯教育に大きく貢献した。長年にわたり我が国の獣医公衆衛生学の発展に大きく貢献していることから、獣医学術功労賞を授与するにふさわしいと判断した。



平成25年度日本獣医師会獣医学術賞受賞者

左から、富田啓介、吉田恵美、澤向 豊、嶋田恵理子、森下正隆、中山正成、亀山光博、東久保 靖、岡本嘉六の各氏